Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま

他館との連携事業報告

平成28年度企画展示始まる!!

東京都埋蔵文化財センター報 104

東京都埋蔵文化財センターと

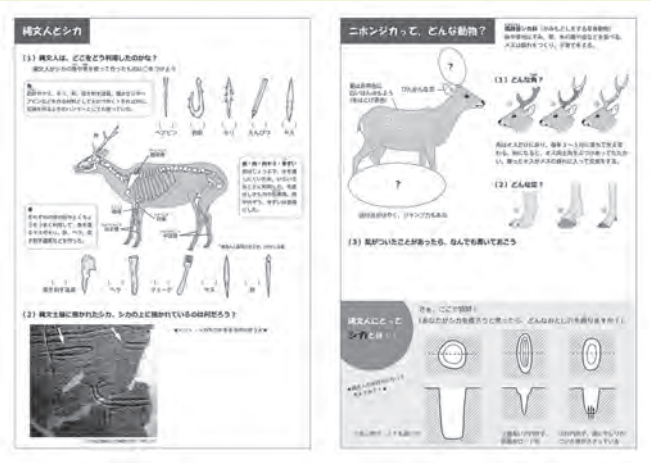
他館との連携事業の報告 2015

東京都埋蔵文化財センター　×　□□□□□。
平成 27 年度も都内の自治体や博物館などと様々なイベントを行いました！

平成 27 年度に当センターが他館と連携して開催したイベントの数は、実に 15 回にのぼります。これらのイベントの開催時期は様々ですが、やはり夏休みの８月と、行楽シーズンの 11 月に集中しています。この中から、多摩動物公園、日野市郷土資料館、（公財）東京都公園協会との連携事業について、ご紹介します。

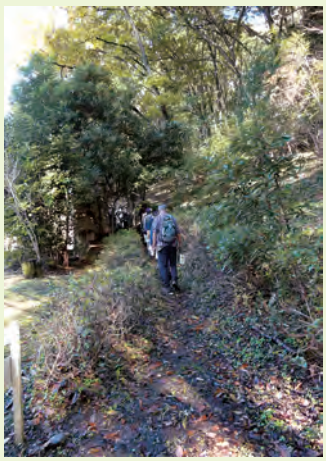
多摩動物公園との連携事業は昨年度に続き２年目の取り組みであり、今年度は８月と 11 月に１回ずつイベントを開催しました。８月の「親子で学ぼう！人間と動物のつながりー縄文人のくらしを探るー」は、考古学と動物学の２つの視点から縄文人と動物の関係性を探る学習型のイベントでした。当日は、縄文人と動物の関わりについてまとめたワークシートを用意し、夏休みの課題にも役立つように工夫しました。ワークシートは全５種類、片面に考古学的な設問を、もう片面には動物学的な設問を載せ、イベントの中で答えが見つかるようになっています。ここではその一例として、シカのワークシートを掲載しました。

一方、11 月のイベントでは「縄文人の森の暮らし」をテーマに、多摩動物公園内でドングリの磨（す）りつぶし体験やドングリに動物の足跡（フットプリント）を描くドングリアートなどのワークショップを行いました。ドングリアートに選んだ動物は、もちろん縄文人とつながりの深い動物たちです。



日野市郷土資料館との連携事業を企画した発端は、企画展示の案内役を務めた「勝五郎（かつごろう）」でした。彼は生まれ変わり談で著名な実在の人物で、日野市郷土資料館では「勝五郎生まれ変わり物語探究調査団」による精力的な調査が積み重ねられています。

そのような同資料館と 11 月３日に共催した「勝五郎生誕 200 年ウォーク　多摩のお墓と勝五郎生まれ変わり物語」では、当センターの企画展示を見学後、勝五郎ゆかりの地を訪ねました。右の写真は勝五郎が程久保村へ行く際に祖母と一緒に歩いたと言われる旧道で、現在は中央大学構内に「勝五郎の道」として保存されています。



同じく 11 月には、（公財）東京都公園協会との連携事業「古代のかわら窯・瓦尾根瓦窯跡群（かわらおねかわらかまあと）探訪ツアー　―里山の自然保護区と古代遺跡をあるくー」を実施しました。この企画の中心となるのが、普段は公開していない瓦尾根瓦窯跡群の見学です。タイトルにもある瓦尾根瓦窯跡群は、現在は都立小山内裏（おやまだいり）公園のサンクチュアリ地区として、谷戸（やと）地形や動植物が丸ごと保全されています。当日は当センターで古代の瓦とそれを焼いた窯について写真を交えながら学び、実際に多摩ニュータウン遺跡の窯跡から出土した瓦の観察も行いました。写真はその時の様子です。その後、同公園に移動し、瓦尾根瓦窯跡群を見学しました。

（小西絵美）

平成 28 年度企画展示

『南多摩発見伝　丘陵人の宝もの』 へのご招待

昨年、2015 年（平成 27）は多摩ニュータウン遺跡にとっては、とても意義深い年でした。じつは、多摩丘陵の一角に所在するこの地に発掘の鍬（くわ）が入れられたのが、今からちょうど半世紀前の 1965 年（昭和 40）だったのです。当時は、東京都がつくった多摩ニュータウン遺跡調査会が発掘調査を行っていました。調査会には、後に、先史時代の研究をリードすることになる小林達雄さんや加藤晋平さんたちも参加していました。その後、1985（昭和 55）年には、多摩ニュータウン遺跡の調査は、財団法人東京都埋蔵文化財センターに引き継がれ、今日に至っています。このような、長い調査の歴史をもつ多摩ニュータウン遺跡に関して、平成 28 年度企画展示『南多摩発見伝　丘陵人（おかびと）の宝もの』と題して公開しました。

今年度の展示では、これまで、50 年にわたり、蓄積されてきた多摩ニュータウン遺跡の調査成果の一端を、皆様にご紹介しながら、丘陵で逞（たくま）しく生きてきた先人たちが遺した貴重な遺産（宝もの）を展示しました。また、日頃、皆さんが疑問に思っていること、不思議だと感じていることについて解説してみました。ここで、今回の展示の見所について、ご紹介します。

まずは入口看板に注目してください！（右上）。背景となった景色は、今ではもう見られない多摩市唐木田にあった里山の風景です。多摩ニュータウン No. 742 遺跡が中央に写っていますが、まさに発掘調査を開始しようとしているところです。上部は、No. 72 遺跡（八王子市堀之内）から見つかった約 5,000 年前の顔面装飾です。今回、丘陵人（おかびと）の姿を想像したとき、真っ先に浮かんだのがこの造形でした。眼を見開き、私たちを真っ直ぐに見つめながら、まるで何かを訴えているようではありませんか。「山や川、そして丘に生き、悠久の眠りについたが、私は今もここにいるのだ！！」と言わんばかりに・・・・。

今回の最大の注目点は、展示ホールの中央に現場の遺跡空間を再現したことです。ここでは、掘った遺構の形状を記録するために、平板という測量器械を使います。これを使って、決まった位置から、地面に掘られた穴や住居までの距離を測って、この側

企画展示のイメージ

点を結んでいくことで平板上の図面に遺構の形を描きます。この時、通常は、実際の長さの 20 分の 1 や 10 分の 1 の縮尺で描きます。この作業は一人ではできません。必ず、距離を測るため、巻尺を引っ張る相方が必要です。

それから、遺構が掘られた地面の高さや穴の深さを記録しなければなりません。この時、レベルという器械が登場します。望遠鏡のような頭に、三脚を取り付けたものです。これを覗（のぞ）いて、遠方の箱尺（スタッフ）の目盛りの値を読むと、穴の深さなどがわかります。レベルは誰でも覗けるようにしていますので、どうして深さがわかるのか、ぜひ、自分で実体験してみてください。

もう一つの見所は、数ある多摩ニュータウン遺跡の調査成果の中で、皆さんが知りたかったことを選び、展示に反映しました。たとえば、「石ころを石器に変えるには？」、「縄文土器はどのように作られたのか？」や、「武士はどのように生まれたのか？」などの素朴な疑問です。

石器に関しては、No. 796 遺跡から出土した見事な槍先形尖頭器の接合資料を使って、その作り方を解説しています。また、縄文時代の土器作り用粘土の採掘場（No. 248 遺跡）と当時のムラ（No. 245 遺跡）との関係が土器や石器の接合によって証明された日本唯一の例から、縄文人の活動を復元しています。また、平安時代末期の武士の発生についても、遺跡で見つかった馬具や太刀の部品により、馬と鉄の文化の関係とは何だったのかについて展示しています。まだまだ、紹介したいことはありますが、後は実際、当センターで直（じか）に展示をご覧ください。

（松崎元樹）

かゆい所に手が届く 遺物の基本的な見方 金属器編②

◇はじめに

前回は、鉄器の見方を中心に記述してみましたが、今回は鉄製品や銅製品などを製作するための技術的な側面に関して述べてみたいと思います。

金属器（製品）を作るための技術全体を「金工」と呼んでいます。金工技術は、一般的には鋳金・鍛金・彫金の３つの手法に分けられています。

これらの技術は、金属の素材、例えば鉄や銅、金や銀、合金などの性質に合わせて、その製作方法も区分されていました。また、銅製品の色調に関しては、銀や金を混ぜる割合によって、調節するという高度な着色技術も江戸時代には確立されていたようです。以下、考古遺物を中心にそれぞれの金工技術を見ていくことにします。

◇鋳金とは？

鋳金とは、金属を溶かしてモノを作ることです。いわゆる鋳造といわれる工程で、熱を加えれば溶け、冷えれば固まるという金属の性質を利用しています。

鋳金の代表的な製品として、銅鏡があります。鏡を作るには、まず、原型となる型を粘土や木で作製して、これに湯（銅合金などを溶融したもの）を流し込み、冷えたところで型を壊して、中の製品を取り出します。弥生時代の銅鐸も、こうした高度な鋳造技術により製作されました。図１は平安時代の八稜鏡の土製の鋳型で、鳥取県伯耆国庁跡から検出されたものです。鏡背面には草木や小鳥の文様が陰刻されています。

◇鍛金とは？

鍛金とは、金属の表裏を金槌等で叩いて造形する技術です。金属を叩くと延びる性質を利用した製作技法で、とくに銅はきわめて展延性を備えた金属です。古代の鍛冶遺跡では、しばしば鍛造工程を示す資料が見つかります。例えば、鍛造剥片と呼ばれるものは、鉄器を整形する過程で発生する鉄片で、微細な遺物です。これが見つかることで、そこで鉄器の鍛錬鍛冶が行われたことがわかります。

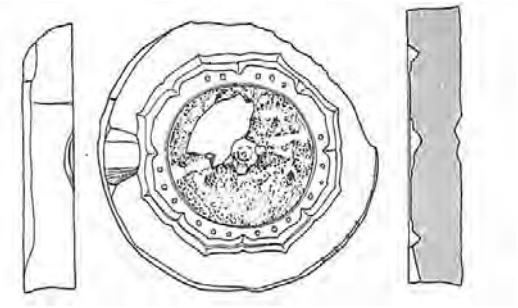


図１　鳥取県伯耆国府跡出土の八稜鏡の鋳型
（「中世・近世の鏡」『日本の美術』No. 394 より転載）

鍛金（造）技術の粋を集めて作られたのが日本刀で、微妙な反りを作り出す高度なテクニックが必要でした。そのため、刀鍛冶の流派の多くが、一子相伝として作刀技術を秘密としていた理由がここにあるのでしょう。

◇彫金とは？

彫金技法は「読んで字のごとく」、金属を削り、表面に文様などを刻み付ける技法です。道具には、先端が細い鑿（工具）が使用されますが、文様の種類によって、毛彫りや蹴彫りなどに分類されます。毛彫りは細く繊細な線をつける際に使われる技法です。一方、蹴彫りは彫るというより打ち込む方法により文様を刻みます。この場合、文様は連続して切り合うような形で施文されることから、「列点文」とも呼称されます。

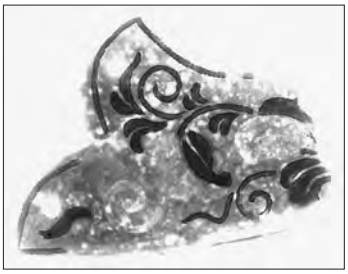


写真１　草木文様のある太刀装具　写真２　象嵌のある馬具の飾り

写真１は、多摩ニュータウンNo. 769 遺跡から出土した鎌倉時代の太刀の足金物で、表面に草木類などの繊細な文様が見られます。特殊な鑿により細かな文様を打ち出しています。

彫金技術の延長線上にあるのが、象嵌技法です。象嵌とは、地金に溝を掘り、その中に細い金属線を埋め込み、文様を描くものです。一般的には、鉄地に金や銀線を埋め込んだものが多く、５世紀頃からは鉄刀に文字や文様を象嵌する例が見られます。写真２は、同No. 22 遺跡から出土した「野沓」という馬具のＸ線画像です。薄い銅板に草花文様を刻み込み、金線を加工して嵌め込んだ飾り金具の優品で、京都周辺で製作された可能性があります。

このように、様々な金属器を観察することで、より多くのことが見えてきます。　（松崎元樹）

遺跡だより 108

府中市　武蔵台遺跡（むさしだいいせき）

所在地：府中市武蔵台 2-9-2 ほか
調査期間：2015 年 6 月～ 2016 年 7 月
調査面積：9500 ㎡

武蔵台遺跡は東京都府中市武蔵台二丁目に位置します。武蔵野台地武蔵野面の南端、国分寺崖線（こくぶんじがいせん）に接しており、周辺には旧石器時代や縄文時代の遺跡が数多く分布しています。奈良時代には本遺跡の南東側の国分寺崖線下に武蔵国分寺が築（きず）かれ、本遺跡付近でもそれに関連すると考えられる多くの竪穴建物跡や掘立柱建物跡が見つかっています。

武蔵台遺跡は昭和 54 年から旧府中病院の改築ｎなどに伴って断続的に発掘調査が行われており、今日までに旧石器時代、縄文時代、奈良・平安時代の遺構・遺物が多数発見されました。今回の調査は東京都立府中療育センター改築工事に先立つ発掘調査で、約 9,５００㎡を対象として平成 27 年６月から開始し、現在も継続中です。

本調査にあたっては調査区を、南側の１区、北東側の２区、北西側の３区と３箇所に分けて調査を始めました。南側の１区では、旧石器時代の調査を行っています。現在の地表から約５ｍ掘り下げた地層から、約３万 5000 ～３万 8000 年前の所産と考えられる局部磨製石斧（きょくぶませいせきふ）（写真１）や石器製作時に残された剥片（はくへん）など 700 点が発見されています。これらは東京都内でも最古の旧石器時代の遺物である可能性が高く、周辺の調査でも数多く発見されていて、その様相の解明に注目が集まっています。

北東側の２区では奈良・平安時代を中心に縄文時代と旧石器時代の調査を行っています。奈良・平安時代では掘立柱建物跡や竪穴建物跡（写真３）が約 20 軒見つかっており、竪穴建物跡からは文字の書かれた瓦が発見されました（写真４）。縄文時代では縄文時代早期（約１万 2000 ～ 7000 年前）の建物跡が１軒見つかっています（写真２）。

北西側の３区は２月後半から調査にかかりましたが、現在までに奈良・平安時代の溝跡や縄文時代の土坑などを確認しています。

発掘調査は７月まで行い、その後整理作業、報告書作成作業に移る予定です。　（遠藤啓輔）

＊表紙は本遺跡における旧石器時代の発掘風景。出土した石器は土柱の上に残し、さらに掘り下げていく。

１　１区 旧石器時代の局部磨製石斧（長さ 10.3 ｃｍ）

２　１区 縄文時代早期の住居跡　撚糸文土器出土

３　２区 奈良・平安時代の竪穴建物跡　壁柱穴が巡る

４　２区 竪穴建物跡から出土した文字瓦
表 ヘラ書き「得万呂」？　　裏 押印「豊」

あの遺跡は現在（いま）！？　Vol.8

― 稲城市若葉台駅北口周辺　　多摩ニュータウン No.471 遺跡 ―

東京都埋蔵文化財センターでは多摩ニュータウン遺跡群をはじめ、都内各地の遺跡の発掘調査を行ってきました。このコーナーでは調査時と現在の写真を比べながら、調査後の遺跡がどのように変わったのかご紹介します。もしかしたら皆さんが日常利用している施設や道路の下にも遺跡が眠っていたのかも知れません。

都心のベッドタウンとして開発が始まった多摩ニュータウン。その造成に伴って行われた遺跡調査により数多くの遺跡が発見されました。調査後の土地には新しい「街」が造られ現在の私たちの生活の基盤になっています。今回取り上げる多摩ニュータウン No.471 遺跡（以降 No.471 遺跡）はニュータウン開発の終盤、1986 年から 1988 年にかけて発掘調査が行われました。

稲城市若葉台駅北口。1999 年の街開き以降も断続的に行われている新規の造成により、現在は巨大なマンション群や商業施設が建ち並び、東京都の「都心等拠点地区」に位置付けられています。

No.471 遺跡は現在の若葉台駅北口から「若葉台公園」（稲城第４公園）にかけての一帯に位置していました。No.471 遺跡からは、主に縄文時代中期前半の集落跡が発見され、竪穴住居跡やそれに伴う土器・石器等が数多く発見されています。出土した遺物の年代から、この場所には縄文時代の複数の時期に跨（またが）って集落が営まれていたことが分かっており、当時において非常に暮らしやすい場所だったのでしょう。

はるか昔、先人達が暮らした場所に新しくつくられたこの街も、かつてのように長く人々が暮らしていける場所になることを願っています。（武内　啓）

写真１：発掘調査中の No. 471 遺跡周辺を若葉台駅西側から北方を望む（左写真）。白破線内では調査が行われている。稲城市坂浜地区の一部であったが、1999 年の街開きに際して「若葉台」に改称され現在に至る。右写真は現在の若葉台駅周辺からの様子。手前には商業施設、写真の左右にはマンション群が並ぶ。中央部は現在も造成が進められている。

写真２：調査された縄文時代の住居跡群（左写真）。縄文時代中期の期間だけで 50 軒以上の住居跡が見つかっている。No. 471 遺跡出土の土偶（右写真）。多摩ニュータウンで最も有名（?）な土偶で、海を渡り大英博物館でも展示された。

No.913・914 遺跡は、町田市小山 15 号に所在する。遺跡は多摩丘陵の西端に位置し、相模湾に南下しつつ東流する境川の左岸域に小支流が形成した小支谷奥に立地する。遺跡面積は No.913 遺跡（3000 ㎡）、No.914 遺跡（2600 ㎡）である。

調査は樹木の伐採からはじまり、終了後、南北方向のトレンチを設定し、土層断面の観察および遺構・遺物の確認を行った。この試掘結果をもとに重機による表土層の剥ぎ取りおよび伐根作業を進め、Ⅱｋ層上面での遺構確認を行った。次にⅡｋ層中の古墳時代前期の遺物を取り上げながら、Ⅲ層面で遺構の確認を進めた結果、古墳時代前期の住居跡４軒を検出した。住居跡の調査と並行してＡ谷の掘り下げとＢ谷の試掘を行った。

Ａ谷は遺構・遺物の検出がされなかったためⅤ層面まで重機によって掘り下げ、Ⅴ層面で遺構確認を行った。当該遺跡での遺構と遺物は縄文時代の土坑 38 基、焼土跡２基、集石２基、古墳時代以降の住居跡４軒、溝状遺構２条、焼土跡２基、土坑 10 基、炭焼窯 12 基である。遺物は縄文時代土器の早期前半から前・中期のもので、石器は石鏃をはじめ打製石斧・磨石類・石皿・礫器などである。古墳時代以降遺物は土器・土製品・鉄器などである。

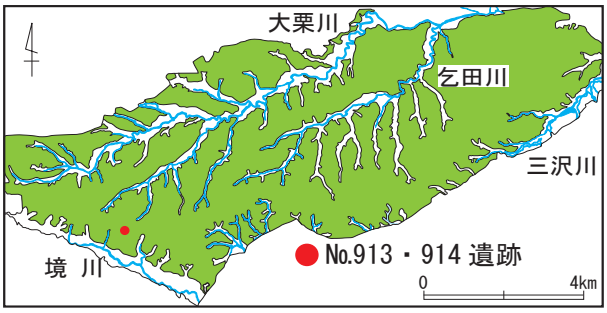
Ｂ谷では谷全体が崩落ロームによって２～３ｍ覆われていることが試掘トレンチで明らかになったため、これを重機で取り除いたが、谷中での安全作業のため、調査範囲を限定的に行うこととした。その結果、Ｂ谷は古墳時代前期の包含層ごとに崩落しており、この崩落層中の遺物取り上げを主たる調査にすることとした。理由は、崩落以前の遺構の検出および地形の観察を行うためには、谷全体を掘り下げなければならず、掘削にともなう湧水対策と排土対策が十分取りきれないと判断したためである。Ⅴ層面で遺構確認した縄文時代の土坑調査も終盤を迎えていたので、ローム層中の遺物の有無を確認するため、試掘を行った。しかしながら、旧石器時代の遺物は検出されなかった。

調査は 1992 年９月 21 日をもって終了となった。当遺跡の調査には中国陝西省考古学研究所の焦南峰氏が特別研修生として参加した。（川崎邦彦）

1/964

多摩ニュータウン地域では、964 ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

＃29 多摩ニュータウン No.913・914 遺跡



No. 913・914 遺跡の位置

遺跡の全景写真

２号住居跡

２号住居跡の調査風景

平成28年度　催事のご案内

催　事　名	対象／人数	日　　時		備　　考
東京都埋蔵文化財センター主催 文 化 財 講 演 会	一般/先着120名	第1回6/25（土） 第2回9/10（土） 第3回11/3（祝・木）	午後　13:30～15:30	当日受付
東京都埋蔵文化財センター・ 多摩市教育委員会主催 文 化 財 講 演 会	一般/先着120名	第1回2/8(水) 第2回2/15(水) 第3回2/22(水)	午後　13:30～15:30	当日受付
遺跡発掘調査発表会	一般/先着120名	3/19(土)	午後　13:30～15:30	当日受付
展示説明会	一般/参加自由	3/19(土)	午前　10:30～11:30	当日受付
映像上映会	親子・一般/参加自由	1/21(土)	午後　13:30～15:30	当日受付
自然観察会	一般/20名	①4/9(土) ②10/1(土)	午前　10:00～11:30	往復はがきで申込み ①3/28②9/20必着
縄文土器作り教室	①④一般30名 ②③親子15組 （小学4年生以上）	製作　①5/14・15(土・日) ②7/23(土) ③7/24(日) ④9/3・4(土・日) 野焼き　①6/4(土) ②③共8/6(土) ④9/24（土）	製作 午前　9:30～午後　16:00 野焼き 午前　9:30～午後　13:30	往復はがきで申込み ①4/28 ②③7/11 ④8/22 必着
土偶作り教室	①親子15組 （小学4年生以上） ②一般30名	①8/3(水) ②11/12(土)	①午前　10:00～12:00 ②午前　10:00～午後　15:30	往復はがきで申込み ①7/20 ②10/31必着
縄文アクセサリー作り教室	①③一般30名 ②　親子15組 （小学4年生以上）	①7/9(土) ②8/10(水) ③2/4(土)	①・②午前　10:00～12:00 ③午後13:30～15:30	往復はがきで申込み ①6/27 ②7/27 ③1/23 必着
コハク勾玉作り教室	①②一般20名	①7/2(土) ②10/1(土)	①午前　10:00～12:00 ②午後　13:30～15:30	往復はがきで申込み ①6/20 ②9/20 必着
勾玉作り教室	親子15組 （小学4年生以上）	8/17(水)	午前　10:00～12:00	往復はがきで申込み 8/3(水)必着
古代の糸作り教室	一般30名	6/11(土)	午前　10:00～午後　15:00	往復はがきで申込み 5/30必着
古代の布作り教室	①一般30名 ②親子15組 （小学4年生以上）	①4/23（土） ②8/10(水)	①午前　10:00～12:00 ②午後　13:30～15:30	往復はがきで申込み ①4/11 ②7/27 必着
火おこし道具作り教室	親子15組 （小学4年生以上）	①8/3(水) ②8/17(水)	午後　13:30～15:30	往復はがきで申込み ①7/20 ②8/3 必着
トンボ玉作り教室	各時間帯　一般6名	①5/28(土) ②7/30(土) ③10/15(土) ④1/14(土)	午前　9:30～11:00 午前　11:00～午後　12:30 午後　13:30～15:00 午後　15:00～16:30 の希望する時間帯	往復はがきで申込み ①5/16 ②7/19 ③10/3 ④1/4 必着
縄文の貝輪作り教室	一般15名	8/27(土)	午後　13:30～16:00	往復はがきで申込み 8/15必着
縄文食体験	一般10名 親子10組	①10/22(土) ②10/23(日)	午前　10:00～午後　13:00	往復はがきで申込み ①②10/11 必着
考古学実習①-土器拓本・断面図-	一般10名	11/5(土)	午前　10:00～午後　15:00	往復はがきで申込み 10/24 必着
考古学実習②-石器観察・実測-	一般10名	11/19(土)	午前　10:00～午後　15:00	往復はがきで申込み 11/7 必着
考古学実習③-カマド・古代食体験-	一般・親子計20名	11/27(日)	午前　10:00～午後　15:00	往復はがきで申込み 11/14 必着
縄文ワクワク体験まつり	参加自由 （勾玉作りは予約制）	5/3(祝・火)・4(祝・水)	午前　10:00～午後　16:00	当日受付
遺跡庭園であったまろう！	参加自由	12/18(日)	午前　10:00～午後　15:00	当日受付
考古学相談室	参加自由	通年(土日は除く)	午前　10:00～午後　16:00	受付随時

●往復はがきでのお申込みは、催事名・住所・氏名・年齢・電話番号をご記入のうえ、
〒206-0033　多摩市落合1-14-2　東京都埋蔵文化財センター「〇〇〇(催事名)」係宛　まで。
なお、応募者多数の場合は、抽選になります。

●「一般」は中学生以上、「親子」は小学4年生以上の親子。　一般対象の催事は、お一人につき1通の往復はがきが必要です。

●ご記入いただいた個人情報は、該当事業実施のための案内のみに利用します。利用目的にご同意の上、お申込みください。

お問い合わせ先(平日のみ):東京都埋蔵文化財センター　経営管理課　広報企画係
電話　042－373－5296　http://www.tef.or.jp/maibun/

たまのよこやま 104　　2016 年 3 月 31 日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒 206-0033 多摩市落合 1-14-2　TEL 042-373-5296　http://www.tef.or.jp/maibun/